

PROGRAM

ブラームス

Johannes Brahms

ヴァイオリン・ソナタ第1番 ト長調「雨の歌」Op.78

Violin Sonata No. 1 in G Major, Op.78

- I. Vivace ma non troppo
- II. Adagio
- III. Allegro molto moderato

J. ヨアヒム

Joseph Joachim

ロマンス ハ長調

Romanze in C Major

ブラームス

Johannes Brahms

ヴァイオリン・ソナタ第2番 イ長調 Op.100

Violin Sonata No. 2 in A Major, Op.100

- I. Allegro amabile
- II. Andante tranquillo - Vivace
- III. Allegro grazioso



クララ・シューマン

Clara Schumann

3つのロマンス Op.22

3 Romanzen, Op.22

- No.1. Andante molto
- No.2. Allegretto
- No.3. Leidenschaftlich schnell

ブラームス

Johannes Brahms

ヴァイオリン・ソナタ第3番 ニ短調 Op.108

Violin Sonata No. 3 in D Minor, Op.108

- I. Allegro
- II. Adagio
- III. Un poco presto e con sentimento
- IV. Presto agitato

PROGRAM NOTES

佐藤俊介とスーアン・チャイによる本日のデュオ・リサイタルは、ブラームスの3つのヴァイオリン・ソナタとヨアヒム、クララ・シューマンのロマンスを組み合わせたかれらの交友を偲ばせるプログラムである。

最初に本日使用するピアノについて述べておこう。ウィーン式アクションの創案者を祖父に、ベートーヴェンらと交流した名工・ナネットを母にもつウィーンのピアノメーカー、ヨハン・バプティスト・シュトライヒャーが1871年に製作したオリジナル楽器 (No.7150)。ブラームスが晩年に所有していたものとはほぼ同型で、かつてミュルツツァーシュラークのブラームス博物館に展示されていたもの。85鍵、ウィーン式アクションで平(並)行弦。のちに現代のピアノへと発展する「イギリス式」と違い、「ウィーン式」は当初の原型のままハンマーヘッドが大きくなったのでタッチは重いものの、ほの暗い甘い音色など独特な趣をそなえていて後期ロマン派にふさわしい。

ブラームス ヴァイオリン・ソナタ第1番 ト長調 「雨の歌」Op.78

ヨハネス・ブラームス(1833～97)は、北ドイツのハンブルクに生まれ、20歳の1853年にハンガリー出身のヴァイオリニスト、レメーニーとともに故郷を出立。その旅の途上で出会ったヴァイオリニストのヨアヒムやシューマン一家と交際。シューマン亡き後、ピアニストとして再復帰するクララをヨアヒムとともに支えるなどして、生涯を通して親しい関係を築き、音楽的にも影響を与えあった。

ヴァイオリン・ソナタ第1番ト長調「雨の歌」は、1878年と79年の夏に南オーストリアで作曲。ウィーンの南西、イタリア国境近くのベルチャッハのヴェルター湖畔という風光明媚な地にあって、穏やかな趣とロマン的な叙情にあふれる名作となった。第1楽章冒頭と第3楽章の主要主題に自身の歌曲《雨の歌》と《余韻》に共通する旋律を使い、とりわけ前者は動機のうえで他の楽章にも関連づけられて全曲の楽想の統一に大きな役割を果たしていることから、「雨の歌」の愛称で親しまれている。

グロートによる歌詞は、「雨よふれ、子供の頃に見たあの夢をもう一度呼び覚ましておくれ」というもの。初演は1879年11月8日にボンで、マリー・ヘックマン=ヘルティヒのピアノ、ロベルト・ヘックマンのヴァイオリンで行なわれた。初版は同月ジムロック社から。**第1楽章** ヴィヴァーチェ・マ・ノン・トロポ、ト長調。ピアノの穏やかな和音で始まり、上述の歌曲の動機と関連づけられるヴァイオリンの伸びやかな第1主題と情熱を秘めつつ伸びやかに歌われる第2主題(ニ長調)によるソナタ形式。**第2楽章** アダージョ、変ホ長調、三部形式。短調の中間部で沈鬱な情感を深めていく。**第3楽章** アレグロ・モルト・モデラート、ト短調。 Rond 形式。《雨の歌》の旋律を主題とした Rond・フィナーレ。

J. ヨアヒム ロマンス ハ長調

ヨーゼフ・ヨアヒム(1831～1907)はオーストリア=ハンガリー二重帝国時代のプレスブルク(現ブラチスラヴァ)に生まれ、ウィーンやライプツィヒなどでヴァイオリンと作曲を学び、名ヴァイオリニストとして一世を風靡した。ロマンスとはロマン主義 (romantic) の語源の一つとされる中世の文学のジャンルで、19世紀にこのタイトルの器楽曲が愛好された。それらは総じて恋愛を暗示し、叙情的な性格をもつ。ヨアヒムには1850年代中頃に出版されたOp.2の1と、1894年に刊行され(作品番号なし)、たんに「ロマンス ハ長調」の名で親しまれている曲があり、本日は後者が演奏される。

ブラームス ヴァイオリン・ソナタ第2番 イ長調 Op.100

ブラームスの第2番イ長調Op.100は1886年8月にスイスのトゥーン湖畔で書かれた。明るい幸福感をたたえた**第1楽章**はソナタ形式。ヴァーグナーの楽劇《ニュルンベルクのマイスタージンガー》の「ヴァルターの優勝歌」との類似が指摘されていて、この旋律は他楽章にも用いられてソナタ全体を統一する役目を担う。また第2主題はブラームスの《5つの歌曲》Op.105の第1曲〈歌の調べのように〉との関連もしばしば言及される。これに緩やかなアンダンテと情熱的なヴィヴァーチェの部分が交替する**第2楽章**、ヴァイオリンの息の長い旋律を主題とする部分とピアノのアルペジオの部分からなる Rond 形式の**終楽章**が続く。

音楽評論家：那須田 務

クララ・シューマン 3つのロマンス Op.22

続いてクララ・シューマン(旧姓ヴィーク、1819～96)の3つのロマンスOp.22。ピアノ教師の父とピアニストの母のもとにライプツィヒに生まれたクララは、幼少期から天才少女として知られ、1840年にシューマンと結婚してからは8人の子供の母として育児や家事に携わり、1856年に夫が亡くなってからは再びピアニストとして復帰。亡き夫の作品の紹介に努めるとともに、ブラームスのよき理解者となり創作活動を支援した。Op.22はブラームスが初めてシューマン一家を訪ねた1853年の作。ライプツィヒのブライトコプフ&ヘルテル社から出版されヨアヒムに献呈された。3つの楽曲からなり、夢見るような旋律と繊細な和声の陰影に富んだ佳品である。ちなみに第1番の自筆譜に「愛する夫へ」、また別の楽譜には「愛する友ヨハネスへ」の書き込みがある。

ブラームス ヴァイオリン・ソナタ第3番 ニ短調 Op.108

ブラームスの第3番ニ短調Op.108は第2番の完成直後に書き始められたもののいったん中断され、1888年の秋に完成。12月8日にコニングのヴァイオリンとクララのピアノによる私的な初演を経て同月21日にブタペストでフーバイと作曲者のピアノにより初演された。初版は翌年4月にベルリンのジムロック社から。3曲のソナタ中、唯一の短調作品。暗い情熱と内省的な趣は、友人知人の逝去や重病など、当時のブラームスが体験した度重なる不幸な出来事の反映と言われている。**第1楽章** アレグロ、ニ短調。哀愁を帯びた第1主題とヘ長調の第2主題からなるソナタ形式の楽章。展開部では、主調の属音「ラ」の保続音がピアノとヴァイオリンに鳴り響く。情熱と孤独の間を揺れ動き、最後はニ長調で印象的に楽章を閉じる。**第2楽章** アダージョもニ長調で慰めに満ちている。**第3楽章** ウン・ポコ・プレスト・エ・コン・センチメントはスケルツォ風。嬰ヘ短調で始まりすぐに転調してメランコリックな気分を深める。**第4楽章** プレスト・アジタート、ニ短調。悲劇的な性格の第1主題と、コラール風の第2主題を中心とした Rond・ソナタ形式。